

追 悼 の 辞

渡辺 睦教授の最初のご病変を私が知ったのは1988年8月の末、小樽商科大学で開催された日本経営学会年次大会でのことであった。教授は同大会で発表なさることを予定されており、私はそれを拝聴するために小樽商大の玄関をくぐったところで渡辺教授のご入院による発表中止を報らされたのであった。

なにごとにつけても責任感の強い方だった教授は、ほどなく退院されるとその年の後期の授業も中断されることなく完結され、翌る1989年度はご健康も回復されて旧に変わらぬお元気な姿に日々接することができるようになり、私たち同僚一同はほんと胸を撫でおろす思いだった。

しかしながら、その年度もおしつまった1990年3月16日の教授会の席上、議案の審議を大きく前進させるご発言をなさって着席された瞬間、決定的な発作が教授を襲い、直ちに入院加療に入ったのもつかの間、翌17日には不帰の客となられたのであった。あれから早くも1年が経過し、周囲の者の心の痛みも消えぬ間に、本誌追悼号を刊行する時が到来した。

渡辺教授は1953年3月本学商学部を卒業されると同時に本学に職を奉じられ、1959年専任講師、1963年助教授、1968年以降教授と、一貫して明治大学のために教授・研究に専念された。

この間本学副学生部長、社会科学研究所長、学生相談員などの要職を歴任され、大学の運営面にも多大の貢献をなされるとともに、広く学会においても日本中小企業学会常任理事、日本流通学会理事として中小企業研究の第1線をリードされたのであった。

渡辺 睦教授は何よりもまず正義感の人であられた。それは教授の定義される「中小業者」への温い共感と、国の中小企業政策への鋭い批判とによくあらわれている。

教授はまた実践の人であられた。つねに中小企業者運動の最前線に立ってその指導にあたられ、中小企業家同友会の育成発展にも多大の寄与をなされた。

そして教授は終生変わることのなかった学生思いの指導者であられた。学習・研究のご指導はもとより、私生活面での相談にも何くれとなく応じておられたことは、周囲の誰もがよく承知しているところである。

そうした、生涯にわたるご研究と実践の成果の集大成として「戦後日本中小企業政策の変遷と

課題——批判的考察と政策提言——」のとりまとめにとりかかられているさなかでのご急逝は、大学・学界にとっての多大な損失であることはいうまでもなく、わが国の社会経済の諸問題解決の面からも大きな損失といわなければならない。

計画性と持久力に富んでおられた渡辺 睦教授の真摯な知的蓄積により、完成一步前まで進捗していた同教授のこの研究成果集大成は、生前教授ととりわけお親しかった高橋 洸，山口 孝，木元進一郎各明治大学教授，福島久一日本大学教授はじめご関係研究者各位のご支援により，故岩尾裕純中央大学名誉教授を編集委員長として世に問われることとなり，本年2月500頁になんなんとする大著の体裁をもって「日本中小企業の理論と運動」の書名のもとに，新日本出版社より上梓された。このことは，渡辺 睦教授ご急逝による深い喪失感を抱く多くの人びとにとって，悲しみの中の些かの喜びであり，今後の中小企業研究の道しるべとして心よりご推薦申し上げる次第である。

渡辺教授のご逝去がもたらした欠落はいかにも大きい。しかしながら，教授のご指導により，多くの人材が社会の各方面において貢献しておられると共に，すでに有能な後継者が，ご遺志をついで活躍を始めておられ，そのことが，私どもにとっての大きな慰めである。

渡辺 睦教授のご冥福を心よりお祈り申し上げて本誌追悼号の追悼の辞とする次第である。

1991 年 3 月

経営学部長 山 田 雄 一